1.警戒するどころか、大翼さんを見つけるとすり寄ってくる牛たち。 2.くりっとしたジャージー牛の瞳。
3.牛舎の周りに住む猫もファミリーの一員だ。

２０１９年３月11日、仙台駅。新幹線の待合所にある大きなテレビモニターに一人の農家の姿が映し出された。福島県鮫川村で酪農を営む、清水大翼（だいすけ）さん（32）だ。東日本大震災後にUターンして酪農を始めたが、福島第一原発の爆発事故の影響で、いまだに放牧ができないと語る若い酪農家の姿は悲劇的に、衝撃的に映し出されていた。しかし、本当の彼の姿は少し違っている。

ぐねぐねと曲がりくねった川沿いに山道を登っていく。一面の雑木林は、全ての葉っぱを落とし、明るい光を通している。標高６００ｍほどの場所に、「ファームつばさ」はある。午前10時、朝の搾乳が終わると大翼さんが牛舎の柵を開ける。待ってましたとばかりに列をなしていたジャージー牛が溢れ出してくる。「我に続けー！」と大翼さん。その横を駆け出していく牛たち。屋外に設けられた15ａほどの運動場には草が生えていない。土は凍ったり溶け

搾乳が終わって柵が開くと一斉に牛舎から飛び出すジャージー牛たち。

たりを繰り返してぬかるみ、トラクターのタイヤ跡で大きなコブができていた。頂上に置かれた牧草のロールに向かって、牛たちは体を大きく上下しながら登っていく。数頭が大翼さんの元に近づいてきた。「俺、ギャルにモテるんだよね」と笑う。どうやら集まっているのは若い牛たちのようだ。「捕まえた！よーしよしよしよし！」と、まるで犬のように大きな牛の頬や喉のあたりをガシガシと両手で撫でてやる。ひとしきり大翼さんにかまってもらうと、彼女たちは満足したのか牧草を目指して丘を登り始めた。

福島の牛乳

一般的に、酪農家は組合に所属し、搾った生乳は毎朝組合のタンクローリーで回収される。各地から集められた生乳は工場で殺菌されて牛乳となって流通する。大翼さんも福島県酪農協同組合に所属し、大部分の生乳を組合に出荷している。原発事故から9年が経過した今でも、福島県を含む17都県においては放射性物質検査が続けられている。加えて組合では、県の検査とは別にタンクローリーごとに、さらに、集めた生乳を一時的に貯蔵するタンクごとに自主検査を行ない、国が定めた値より低い独自の基準値を設けている。また、飼となる牧草については除染を完了した農地で採取したもののみを検査してから与えることとし、放牧は禁止としている。福島県全域で、２０１１年５月23日以降は検査機器で検出できない状態（検出限界以下）が続いているが、組合は自ら定めた厳しいルールを守り続けている。草がない土地であれば牛を外に放してもよいので、昨年の春、大翼さんは牛舎の外に運動場をつくった。牛たちは朝晩の搾乳の時間以外は自由に外に出ることができる。「日中は外で陽に当たって風に吹かれてる。朝にはお腹に泥をくっつけて帰ってくるから夜も外にいるみたい。やっ